

# 家に帰るのに 理由なんていない

いちき串木野市医師会立脳神経外科センター  
訪問看護ステーションさくら 所長 畑中勇二

誰しも年を重ねると何かしらの病気と付き合いながら生きていく。もちろん、病気とバイバイできればいいのですが、そうはいかないようです。それでも「自分らしく」は生きられます。そして「自分らしさ」とは、選択肢を誰かと一緒に考え、自分で自由に選択できることではないかと思えます。自分の家で過ごすことが、自分らしさとは限りませんが、ありのままの自分を想像すると、自宅で過ごす「私」や大切な人と過ごす「私」を思い浮かべる人も多いように感じます。

私は、訪問看護師として在宅医療に携わっています。「入院をしている方が、こんな状態で、家で過ごせますか？」という質問を受けることがあります。「私は、病状に関わらず自宅で療養することは可能です」とお答えしています。但し、「ご家族にとってかけがえのないその人が望み、ご家族の方もその人の望みを叶えてあげたい、家で過ごさせてあげたいといった希望を持っていることが大切です」とお伝えしています。私の肌感覚としてですが、本人とご家族が同じ思いでいる場合は、困難感なく希望通りになるようです。一方でお互いの意見が違う、不安を解消できていない場合は、歩み寄り、不安を最小限にして、意思決定支援をする必要があります。私達は、本人やご家族の思いを叶えるためにどんな支援ができるかを一緒に考え行動していくことを大切にしています。

家とは何でしょうか。居場所として在る自分の家にいることは自然で、なぜ家に居たいのかという問い自体が不自然です。さまざまな方を支援していく中でも、家で過ごすことに理由はないのだと感じます。「家で何がしたいですか」という問いをよく耳にしますが、何かをするために家に居るのではなく、家そのものが居場所であり、そこに居ることが生活することで、生きることそのものなのです。

疾患により身体が自由に動かない、病状が安定しないなどさまざまな理由で、医療や介護が必要になります。誰かの支援なしで安心して生活を継続することが困難な場合には、ご家族の支援だけでなく医療保険、介護保険など公的なサービス、地域の人々の支援を受けながら生活を継続していくことになり、必要に応じて医療機関への入院や介護施設を一時的に利用した場合でも、家に帰ることを選択肢の一番にしているということです。それは「家に帰りたい」と言葉にすることから始まるのです。医療者が「家に帰れますよ」と家に帰る選択肢を提示することも大切だと思っています。家に帰れない理由はどこにもないからです。しかし、医療や介護を受けながら家で過ごすためには、しっかりとした準備が必要です。準備について今回は詳しく書きませんが、



医療者やケアマネジャーなどの専門職と一緒に考えてくれますので積極的に相談することが重要です。

ご家族の介護支援を受けながら家で過ごす方がほとんどですが、一人で過ごされる方もいます。当ステーションで、一人暮らしで最期まで自宅で過ごした方の支援を経験させて頂きました。その方は高齢で癌を患っており目も不自由でしたが、「入院せずに家で過ごしたい」と望まれました。近所に住む兄弟の見守りと訪問看護、訪問介護、訪問診療、ケアマネジャーの支援だけでなく、民生委員やご近所の方、お友達などさまざまな方が「家で過ごしたい」という望みを共有して、それぞれができる支援をしました。印象的だったのは「私は満足している、ここでいいです」という言葉です。私は、「私は満足している」と言葉にされたその方を羨ましく、すごいとも思いました。自宅で最期の時を過ごし、やすらかに旅立たれました。最期まで支援させて頂き、寂しさもありましたが、「よかった」という安堵感が先だったと思います。

私自身、訪問看護師として関わる中で、様々な利用者様や専門職との協働による学びを得ながら、考え方が変化していることに気づかされます。「家に帰るのに理由なんていない」そう感じています。

## 事業所紹介

### 「いちき串木野市医師会立脳神経外科センター訪問看護ステーションさくら」

行動指針「やさしく・強く・おもしろく」優しさを優先し、専門職として強さを持ち、自分自身も楽しむ。

一緒に働く仲間が、助け合い協働していく、温かいステーションです。地域の専門職の方々と連携し、「生きることの支援」を実践します。地域の訪問看護を必要とされているすべての方に、訪問看護を届けます。

いちき串木野市の訪問看護ステーションは、「訪問看護ステーションさくら」「こじか訪問看護ステーション」の2事業所です。訪問看護の利用者は、約261人。

(平成31年1月～令和元年12月総実人数)